

韓国宗教学研究会編『韓国宗教文化史講義』

韓国青年社，1998年10月刊，503頁

李 勝鉉

本書は、1980年中頃からの韓国における宗教学の総体的研究を進めてきた韓国宗教学研究会の討論内容を編んだ一冊である。韓国における宗教学はおよそ、70年の歴史を持っている。しかし、その研究は個別の宗教伝統、または部分的な研究に集中していて本格的な韓国宗教史を扱うことが難しかった。まれに「韓国宗教史」という題名の著作があっても諸宗教別の叙述であり、簡単な略史にとどまるのが事実であった。本書はこのような問題を感じた研究者達の試みである。

韓国社会は古くから様々な宗教が共存して社会的・宗教的な役割を分担し、調和してきた経験を持っている。ただ宗教が違うと言っても、それは同じ土壌で形成された同一の文化伝統を引き継ぐ単一民族下の宗教共存であった。

しかし、このような多宗教文化の調和と融合を志向してきた韓国宗教へのアプローチにはあまりにも大きな壁がたちはだかってきた。それは、日本の植民地支配の宗教政策であり、西欧宗教文化との共存である。特に、筆者は韓国における宗教学が学問として取り入れられたのが日本の植民地下であり、それは植民地支配を正当化する手段として利用されたこと、そして、解放とともに欧米が強制的に統合したソウル大学の宗教学科において、1970年代までキリスト教神学を中心とした比較宗教学の研究が主になっていたことなどを考える際、韓国人の宗教性と宗教学の見えない乖離を考えるようになった。それを解決するためには一目で古代から現代まで、韓国人の宗教性がどんなものであり、社会構成、文化状況に対してどのように対処し、変化を続けてきたかを考察することに重要な意味があると思っている。

本書にはこのような問題意識に触れ合いながら韓国宗教の研究に目を向ける30、40代の学者たちの長い研究成果が表われているとみられる。しかし、本書に収められている内容は、著者たちが巻頭に述べているように各会員の研究抜粋を中心として討論を編んでいるため、特別な方法論や学問的な志向が見えにくい。それにも関わらず、本書からは韓国宗教史上にあった主な事件、または人物と向き合って今まで研究分野から疎外されてきた宗教学の様々な問題点に立向う鋭さがうかがえる。これはこの本が特定の研究者に依存したのではなく、専門の研究者たちが共同の問題意識を長く持ちつづけた討論の結果生み出された学問書であるからだ。このような意味で単純に過去からの宗教史を読むことにとどまらず、あらゆる韓国宗教を研究する上での今後の手がかりを示しているところに本書の意義を探っていききたい。

本書は以下のように構成されている。

- 序論 韓国の宗教文化の概観
- 第一章 先史及び三国時代の宗教文化
- 第二章 高麗時代の宗教文化

第三章	朝鮮時代の宗教文化
第四章	近代の宗教文化
第五章	現代の宗教文化
結 論	韓国宗教の展望と課題

なお、本書は韓国語で書かれている。そのため、この書評では、編者たちが扱っている韓国宗教文化の理論をできるだけ紹介する形を取りたい。その際とくに、筆者の関心を引いた第四章近代の宗教文化を重点的に述べていき、自分なりの韓国宗教史の展望と課題を模索してみたい。

まず、本書の序論では宗教文化が社会制度と関連して「制度宗教」「新興宗教」「民間信仰」として分析されている。韓国における制度宗教としては儒教、仏教などの東洋の古典的な宗教とカトリック、プロテスタントなどの西欧の宗教を言う。新興宗教としては19世紀中頃からの東学運動以降に発生した韓国の自生宗教、同時期に流入した正教会などの西欧宗教、そして日帝時代に流入した日本宗教、最近現われたキリスト教系と仏教系の新宗派を言う。民間信仰としては巫俗、民間道教、自然信仰などの先史時代から大きな影響力を持ち続けてきた宗教を言う。

そしてそれらに対する韓国宗教文化史の特性を編者たちは4つにまとめて取り上げている。第一に、文化史的な側面では様々な古典宗教がいまだに伝統を守り、その機能を果しているとされる。出家者中心の文化を守りながら何百年も前のお寺を修復している仏教、最近、宗教化を宣言した儒教、保守・敬虔主義の信仰を主としてわずか100年の宣教史にもかかわらず世界五大キリスト教宣教国家になっているキリスト教はどこにもみられない韓国における状況である。第二に、宗教文化的な次元では、調和と融合の精神が古代から現在まで重視されているとされる。そして、第三に、宗教領域において多様な宗教伝統が共存しており、一つの宗教においても多様な信仰体系が共存している重層的構造である。確かに、韓国の宗教界には多様な宗教が共存しているが、どの宗教も主導的地位にはない状況である。最後に、韓国人の信仰経験こそ重層的な構造であるとされる。家庭生活には儒教的信念体系、職場生活には西欧的な価値観、不幸な事件には巫俗などその時々状況によって宗教を選択し、活用する信念体系が特徴として論じられている(p12-17)。全体を通して見れば、このような特徴には、東アジアにおける諸宗教の共存という異質的な諸宗教の文化伝統が一塊になっている状況がみられる。それはキリスト教の同一な文化伝統が共存している西欧における教派の多様性とは違うものであると思われる。

このような理論に基づいて第四章で扱っている近代の宗教文化を詳しくみてみよう。著者たちは韓国近代史の始まりを、1860年代の全国的な農民抗争から1894年の甲午改革—朝鮮31代の高宗皇帝時代に政治制度を近代的に改革したこと—が行なわれた時期と捉えている。学者によって少し差があっても、ほぼその時期から1945年の日本の植民地支配からの解放までを韓国近代史として取り上げている。したがって、この時期は近代国民国家を建設しようとした韓国社会の意志と努力がどんなものであり、それが日本の侵略政策によってどのように変化してしまったのかが観察される場所なのである。

こうしたなか、編者たちは韓国宗教史の立場から見て韓国の近代が中世的な宗教形態から分解し始めたことを大きく捉えた。すなわち、いまだ伝統的に韓国社会を維持してきた儒教や仏教の社会的な位置が変化し始め、またプロテスタントとカトリックなどの西欧宗教が流入し、それに向き合う東学のような新宗教運動が所々に発生したのがこの時期の変化である。このような動き

について著者たちは「近代宗教地形の成立」(p274 - 280)と「帝国主義と政教分離」(p352 - 357)という分析を立て、西欧のように宗教改革を通して形成していた市民社会とは大いに異なった韓国の伝統社会が社会構造と宗教構造の間に緊密な「合致的宗教-社会」の構造を持っていたことを指摘している。また、そのように伝統宗教が伝統社会の再生産を担当している場合、もし宗教体制に転換と再編が行われるとしたらそれは少なくとも伝統社会における体制を崩壊させる出発点にもなることを示すものである。このような観点からみれば、ここで一番問題になるのはこの過程に立向う国が自立性を持ってその問題を解決してきたか、そうではなくて植民地支配という他の力によって強制的に行われてきたか、という点である。韓国の場合はこうした大変な時期に、西欧近代性・近代制度の流入という先進西欧帝国主義からの圧力と、東アジア文化圏を侵略した後進日本帝国の植民という二重の支配体制に巻き込まれていた。それは常に、韓国の伝統宗教が、西欧キリスト教に抵抗して伝統を守る宗教としての役割と、日本政策である「日鮮同祖論」に抵抗する改革宗教を果さなければならない二重の負担を持ち込む結果になったと思われる。伝統宗教が今日のように衰える原因になったのは、伝統と近代の葛藤関係の中でそれぞれを乗り越えなければならなかったその負担にあったのではないだろうか。

ところで、こうした社会に新しく希望を求めたのが東学を中心とした新宗教の出現である。本書では「東学の成立と発展」(p281 - 288)、「教祖伸冤運動(信仰と布教の自由化運動)と東学農民戦争」(p358 - 365)、「新宗教の後天開闢思想」(p366 - 371)を扱い、新宗教の成立基盤を論じている。特に、ここで注目すべきは、東学の教祖である崔濟愚における地上仙境、甌山教の教祖である姜一淳における後天仙境、金一夫の正易、円仏教の教祖である少太山朴重彬の理想的な仏国土が後天開闢の交易時代に対する歴史の認識と現世に現れる後天樂園の思想を次々に訴えたことである。このような後天開闢思想は、新たに來るべき世界と宇宙の秩序の中心に韓国を置いて民衆に希望を与えていたし、先・後天の概念によって宇宙開闢と心霊開闢という理論を体系化し、その後には発生する諸新宗教の成立基盤を提供している点で意義がある。しかし、このような宗教の流れの中で、日本帝国下の朝鮮総督府における宗教政策は、韓国宗教の弾圧と分裂、歪曲の結果をもたらしていた。特に、ここで筆者が注目して言いたいのが類似宗教論である。朝鮮総督府は当時京城帝国大学の教授である秋葉隆、赤松智城、そして総督府の村上智順などによって朝鮮の新宗教を類似宗教として調査、分類し、弾圧し始めた。そのような宗教弾圧が解放以後の韓国宗教界に分裂をもたらす要因となり、韓国戦争以後に発生する諸新宗教を類似宗教とか邪教として指目する根拠となったのではないだろうか。

また、それと関連して本書には日本の植民地支配の韓国宗教史を朝鮮総督府による「日帝の宗教政策」(p378 - 383)、そして日本仏教との関係の中で起こった宗派間の財政問題、出家者の結婚問題などを論じた「日帝時代の仏教」(p315 - 319)が収録されている。民衆の中で勢力が広がっていた新宗教の活動については「近代新宗教の発展」(p320 - 326)の項目に載せている。特に、三・一独立運動の前後における諸韓国宗教の植民地打開の努力が「反帝民族運動と新文化運動」(p327 - 334)に分かりやすく整理されていて当時の宗教運動の組織性を見出すものになっている。

このような近代の韓国社会において注目して見るべきことの一つが韓国におけるキリスト教の近代史である。本書では「初期プロテスタントの宣教政策」(p306 - 313)、「カトリック教案の

宗教史的位相」(p372 - 377) が初期のプロテスタントとカトリックが村社会にまで踏み込んだことによって起こった社会問題に焦点をあてて興味深く論じられている。そして、まだ韓国の土着文化に定着しないまま社会的な影響力が広がったプロテスタント系の西欧宣教師の白人優越意識が、当時の民衆によってどのように批判されたのかが「反宣教師運動の展開」(p384 - 389) で論じられている。ここではさらに、このような社会問題が現れる中で、西欧の既成教団とは分離して独自の韓国のキリスト教団を成立させようとして起こった当時の韓国キリスト教系の小宗派運動の活動と、それが1930年代後半に日本によって反米・反西欧の感情に利用されて複雑な状態に巻き込まれてきたという状況が分析されている。

また、編者たちは、植民地下に限らず、資本主義的な発展をになった労働者階級と社会主義思想の流入に注目して論じている。1920年代以後は「社会主義の流入と宗教の対応」(p335 - 341) にみられるように宗教界と社会主義者たちの間で様々な論争と対立が発生した。ここで特に敏感だったのがキリスト教であり、その対応の一つとして現実社会から逃避しようとする来世志向的な神秘主義信仰の性向が現れたのは、韓国キリスト教の行方の上で重要なことではないだろうか。結局、この時期から始まった社会主義と宗教の葛藤は簡単に終わるものではなく、以後の民族両極化へ立向う韓国の現代史のおおもととして避けられない部分になったと思われる。

本書には様々な宗教の文化状況が論じられている。特に、近代になって「道」「法」「学」「術」などの伝統的な宗教概念が後退し、新しく「宗教」という特定な枠組が設定され、そうしたイメージにあわせて自己変革を行ってきた諸宗教の姿が認められる。しかしながら、本書では、一般民衆の中で沈んでいた民間信仰がどのような展開をし、近代に立向かってきたのかは論じられていない。それは課題として残した部分であると考えられる。何よりも近代の敵として「迷信」化されてきた自然信仰、巫俗などの足取を考察することは、古代からの韓国人の宗教性の変化を考える時、最も重要なことではないだろうか。

本書が持つ意義は読者によって様々であろう。筆者は現代のアジアに生きるものにとってきわめて影響が大きかった近代を中心として本書を読んできた。しかし、本書は韓国の古代から現代までの宗教文化史を論じ、現在の宗教に忘れてはならない宗教の在り方を幅広く訴えるものになっている。近代以後の韓国社会は短期間の内に、植民地化とそれからの解放、そして南北分断と統一への努力という絶え間のない激変期を歩んできた。韓国の宗教史は、このような韓国の歴史とともに歩んできた韓国人の生き方の現われであるだろう。本書は、その間後ろを振り返る暇もなく近・現代を生き、現在に立向かっている韓国宗教文化の鏡ではないだろうか。編者たちは最後に、外来宗教の受容と再創造、宗教生活の積極性と現実生活へのバランス感覚、そして重層的な信仰心の中で独善とエゴイズムを乗り越えた諸宗教の調和と寛容の精神を、韓国人の宗教性としてまとめている。たしかに、Keel Hee-Sung 教授が“Buddhism and Christianity —Towards Their Creative Encounter and Ultimate Unity”の論文に述べているように、世界宗教である仏教とキリスト教が儒教的倫理と心性を持った人々によって葛藤を緩和されていく形は、韓国の宗教文化だけにみられる現象かもしれない。本書はこのような韓国宗教が果してきた肯定的な面、そして、これから避けなければならない課題の双方を提示しているのである。

以上、筆者は韓国の宗教史を社会状況と文化状況の上で教えていただき、本の一部を紹介した。James Huntley Grayson が *Korea: A Religious History* の序論で、西欧の研究者が、韓国とい

う国がアジアの文化史と宗教史の中でどんなに重要であるかを知らないのでこの本を書き、その意義を主張すると言われたように、筆者も韓国の宗教史が持っている意味を日本の宗教史の上で共に考えたい気持ちでこの本を紹介したのである。

本書は韓国語で書かれているため、日本の研究者には利用が難しい。従って、韓国宗教史の概論として、次の著作を参照していただきたい。

1. James Huntley Grayson, 1989, *Korea: A Religious History*, Oxford University Press.
2. Keel Hee-Sung, 2000, "Buddhism and Christianity —Towards Their Creative Encounter and Ultimate Unity", (鼎山宗師誕生 100 周年記念国際学術大会編「未来社会と宗教」, 円光大学出版会。)